第2群

5

精神病者の退院時の思い

～退院後の役割に焦点を当てて～

○山崎　浩子、堀尾　恵、久保　博美
（医療法人近森会近森病院第二分院）

Ⅰ．はじめに

今までの精神科病院は社会から精神病者を隔離的・保護的に収容する場所として機能してきた。しかし、精神保健福祉法の制定以降患者を病院から地域に帰して精神障害者の地域生活を支えることに重点をおいた理念が示され、精神障害者への医療・ケアは「短期入院から地域ケアへ」と一連の医療・ケアの流れとして急速に進んできている。実際には、入退院の回転の速い短期入院患者が増えてきてはいるが、入院患者の層は、短期入院グループと長期入院グループに二極化してきている。当院においても、入退院の回転の速い短期入院患者は増えてきてはいる。しかし、短期入院後退院をしてもすぐに病状悪化し、再入院を繰り返すというケースや、退院が決まった時点で病状が不安定になり、退院日が延期になるといったケースも少なくない。入院中から退院後の生活に精神病者自身が注目し、自信を持って退院して貰うことで退院後の生活を円滑に行えるように感じる。そこで精神病者自身が「退院」というイベントをどう感じどう受け入れているのか、また退院後の生活をどう考えているのかを知ることが必要だと考えた。

今回、研究目的を「精神病者の退院時の思いを明らかにする」とし、研究を行ったのでここに報告する。

Ⅱ．研究方法

対象者は当院の回復期病棟に入院中で退院を間近に控えた患者とし、研究の目的を説明し、同意の得られた者とした。研究者が作成したインタビューガイドを用いて、倫理的な配慮を行い面接法によりデータ収集を行った。得られたデータは逐語記録し、質的帰納的研究方法を用いて対象者の言葉を重視しながら、退院時の思いを分析していった。

Ⅲ．結果および考察

今回の研究で、精神病者の退院時の思いの特徴として、下記の 10 のテーマが抽出された。特に自分たちが興味を持ったテーマ 2 に焦点を当てて考察を深めていくことにする。

≪テーマ 2≫

本人が役割を期待されていないと感じることで、退院後の自分の存在価値を見いだせず、退院に対しても前向きな気持ちになれない。

【テーマの説明】

発病・入院により自身が最も存在価値を見出していた、役割を遂行できなくなったことで、自身の役割全てがなくなったかのように感じており、家族が思いやりの

気持ちでかけた「今回も帰るだけでいい。寝ててもらったらいい。」という言葉さえも本人にとっては退院後の役割がなくなったという印象となり退院自体を前向きに考えられなくなるという特徴がみられた。

テーマを構成するケースの語った言葉より、本人にとっての退院後の家庭生活において役割がないと感じていることが読み取れた。

例えば退院に対する思いを「退院したい半分、したくない半分やね」と語ったケースは、家庭の中心で家事をこなしてきたが、発病後家族の思いやりからとはいえ「何もしなくてよい」と言われたり、また別のケースでは自分が店主でありたい思いと裏腹に店主ではいられないといったことを語っており、自分が行うべき役割が見えなくなっている様子がうかがえた。

これらのケースは、野嶋の定義する個人－役割間葛藤の状態にあると考えることができた。本人にとって退院後の役割が見いだせないということが、退院への動機づけを困難とし、退院に対する不安が強くなっている様子がうかがえた。このことから、入院患者にとって退院後の生活における役割は、重要な要素となっているといえる。

役割というひとつの視点からみた時、看護として退院後の生活への不安を軽減し、退院への動機づけを明確にするために、1.本人が本人なりに考える役割はどのようなものか2.家族や周囲から考えられている役割はどのようなものか3.本人の考える役割は退院後どのように変化するのか4.家族や周囲は本人の役割変化をどのように捉えているのかをアセスメントし、役割葛藤を最小限に抑え、退院後の生活が再統合できるよう働きかけていくことが必要であると考える。

今回の研究対象者のように「役割がない」と感じている患者であっても、上記2.や4.のアセスメントを深めていくなかで、精神病者の存在自体が役割と考えられうるような、精神病者や家族への働きかけがあるのではないか。精神病者個人には長い生活歴があり、培ってきた価値観を限られた入院期間の中で変容に導くことは困難もあるが、出来うる限り退院後の役割を明確にすることは、自分の力を充分発揮してその人らしく社会で暮らす助けになると考える。

V．おわりに

今回の研究より、精神病者が退院時にどのような思いを抱きながら退院の日を迎えているのかを知ることができ、退院後の生活への不安を軽減し、退院への動機づけを明確にするための看護についての考えを深めることが出来た。しかし、短期間の研究で対象者数が少なかったこと、研究者のインタビュー技術が未熟で十分なデータが得られなかったことなどがあり、この研究を一般化するには限界がある。

今回の研究にて明らかになったことを少しでも退院時の看護に生かしていきたい。